

論文

“Noun + Adjective”型 Asyntactic Adjective Compound の語法〈 I 〉

大 滝 真

On the Usage of Asyntactic Adjective
Compounds : Type “Noun + Adjective”〈 I 〉

Makoto Ohtaki

目 次

I. はじめに

II. Asyntactic Adjective Compound : “Noun + Adjective”型複合形容詞
の生成と特徴

1. Asyntactic adjective compound の 3 種類のタイプ

2. “Noun + adjective”型複合形容詞の典型的用例

3. “Noun + adjective”型複合形容詞の生成の仕組み——基底構造
と頻出形容詞

III. “Noun + Adjective”型複合形容詞の初出年調査

IV. 結 び

References

I. はじめに

現代のジャーナリズム英語に顕著に認められる premodification という言語的傾向については、これまでに発表して来た数篇の論文の中で、その用法を細かく分類し、print journalism からの実際の使用例を多数紹介しながら、その実体を明確にする試みを行って来た。

使用した用例はほとんどすべて、実際に筆者がかなりの年数をかけて収集したものであるが、本論文が今回目指したものは、premodification に関する用法のうち、多少言及したもののまだ詳細に互って論述していない部分に属する用法である。

“Noun + adjective” 型 (タイプ) の adjective compound には、例えば

acid-free, earthquake-prone, ratings-conscious, trigger-happy, wafer-thin, razor-sharp, battle-ready, dirt-cheap, war-weary, god-awful, color-blind, etc.

のような複合語が含まれるが、かなり古い歴史を持つ *bloodthirsty, pound-foolish, jet-black, blood-red* などの語も同じ adjective compound (複合形容詞) に属している。

20世紀に入ってから、adjective としての機能を持ち、この種の構造 (‘Noun + adj.’) を備えた 2 要素から成る複合語、特に、第 2 構成要素として *-efficient, -friendly, -poor, -savvy, -proof, -prone, -neutral, -specific, -shy, -readable* などの adjective を持つ語が目立って増えている。

本稿では、以上挙げたような 2 構成要素から成る adjective compound について、収集した多数の用例を適宜示しながらその用法を詳述し、且つ、その特徴と最近の傾向を明示したいと思う。第一弾、第二弾の 2 回に分けて詳細に記述し、考察を進めていくつもりである。

収集した用例の出所を以下に示す。主なソースは英字新聞、雑誌 (特に *newsweeklies*)、その他の print journalism で、使用した用例は、1991 年から約 10 年間のものである。

[調査資料]: *Asahi Evening News (AEN), Time, Newsweek, The Japan Times*

(JT), *Fortune*, *The Economist* (*Economist*), 他。

上の書名末尾の () 内は、本稿で使用した略字である。

II. Asyntactic Adjective Compound

(1) Asyntactic adjective compound の 3 種類の型 (タイプ)

adjective compoundの中には、統語法のルールに基づいた語順で構成要素が配列されていない種類の複合語がある。このような複合語は通例 ‘asyntactic (または non-syntactic) compound’ (非統語的複合語) と呼ばれる。

非統語的複合形容詞は大別して 3 種類ある。まず第 1 は、“Noun + verb(-ing)” 型のもので、例えば *bone-chilling* weather, *performance-enhancing* drugs, *nerve-jangling* Chinese missile exercises, a *nerve-wracking* business, a *gas-guzzling* car のような verb(-ing) 形の前にある名詞がその動詞の目的語になっている、本来 ‘verb + object’ に由来する複合形容詞である。

次に、第 2 の型は、“Noun + verb(-ed)” 構造のもので、a *smoke-clogged* cafe, the *sewage-contaminated* Nile Delta, *mosquito-infested* rain forests, *doctor-assisted* suicide などの語のように、いずれも統語的ルールに基づいて形成されたものではなく、本来、受動態の基底構造を持っていた後置の adjective clause (または phrase) が、ハイフン付きの限定付加語として主要語の前に移動して複合形容詞になったもので、これが第 2 の型である。

本稿では、これらの用法に言及することは避け、残る第 3 型、すなわち、“Noun + adjective” 型の構造を持つ複合形容詞に焦点を当て、考察を進めることにしたい。第 2 構成要素は、従って adjective が中心となる。

“Noun + adjective” 型の複合形容詞は、本来、基底構造においては主要語に対して後置修飾関係にあった adjective clause (or phrase) が、非統語的な語順配列を行うことにより、前置修飾 (premodification) の限定付加語としての機能を持つ短縮化した表現になったものである。次に二、三の例を示

す。以下の各下線部は“N + adj.”の構造を持つ compound adjective を表している。

手持資金の豊富な起業家たち

cash-rich entrepreneurs

アルコールを含まない飲料

alcohol-free drinks

奇矯な、ミスをよくするマッケンロー

erratic and error-prone McEnroe

きわどい（僅差の）勝利

a wafer-thin victory

やたらとカメラを使う（自然）保護論者たち

camera-happy conservationists

新しい仕掛けに夢中の日本の買物客

Japan's new-gizmo-crazy shoppers

雪崩が起きやすい山腹

the avalanche-prone mountainside

燃費の良い車

a gas-stingy car / a gas-efficient vehicle

労働集約型分野から科学技術集約型分野への投資の転換

investment shifts from labor-intensive to technology-intensive fields

以上、いくつかの例を示したが、このような“Noun + adj.”の構造を持つ複合形容詞は、現代英語の journalesque の中で使われる傾向が強く、特に新聞やニュース週刊紙に頻出すると言える。次節では典型的な用例を紹介し、後節では更に、基底構造に着目した語形成の仕組みを明確にしたいと思う。

(2) “Noun + adjective”型複合形容詞の典型的用例

この種の語形成においては、前述した通り本来の基底構造をベースに表現の簡略化が計られ、修飾される名詞（主要語）の形容詞的付加語として後置修飾から前置修飾へと語順を変換し、短的に、スピーディーに表現される結果、紙面の限られたスペースを節約し、語義のプロミネンスが増し、ジャーナリスティックな効果を生むと言えよう。

次に、二つの用例を除き、これまでに収集した多数の最近の新聞・雑誌等で実際に使用された生きた用例の中から、このパターンの典型的な用例を提示することにする。出典は各用例の後の [] 内に示し、イタリック体になっている複合語の部分の和訳を次の () 内に表記することにする。

- ① In the land of *power-hungry* lawyers, Starr takes the prosecutorial culture a beat too far. [*Newsweek*, Mar. 9 '98, p.30 (権力欲の強い、権力を手中に納めたがっている)]
- ② Now a single *computer-literate* salesperson does it all with a few extra keystrokes. [*Time*, Nov. 13, '95, p.22 (コンピュータを使いこなせる、コンピュータ操作能力のある)]
- ③ Kerkorian, who owns 10 percent of Chryster, is notoriously *publicity-shy*. [*Newsweek*, Apr. 24, '95, p.30 (世間に知れ渡ることが嫌いな)]
- ④ ...there are probably no more than a few thousand computer hackers, futurists, fringe scientists, *computer-savvy* artists and musicians, ... [*Time*, Mar. 1, '93, p.31 (コンピュータに精通した)]
- ⑤ Belying the critter's docile appearnace, their (i.e., soft shell turtles' or *suppons*') beak-shaped mouths bear *razor-sharp* teeth that can sometimes prove dangerous... [*AEN*, July, 27, '93, p.5 (かみそりのように鋭い、物すごく鋭利な)]
- ⑥ There will be lots of clever advertisements by firms that have the perfect product of service to offer the newly *budget-conscious*. [*Economist*, Sept.

- 5, '98, p.72 (予算に強い関心を示す (人たち))]
- ⑦ Some (aircraft bogus parts) even come from the production overruns of legitimate manufacturers — parts that may be *airworthy* but also can be production line rejects. [AEN, Dec. 20, '96, p.5 (航空に耐える、耐空性の)]
- ⑧ In a new report it concludes that “*energy-efficient*” technologies remain underutilized. [Newsweek, Oct. 20, '97, p.51 (エネルギー効率がよい)]
- ⑨ *Network-centric* computing will change many of the rules of the PC software game, giving IBM yet another chance. [Fortune, Apr. 29, '96, p.65 (ネットワーク中心の; 放送網に焦点を当てた); *-centered* という形も使われる]
- ⑩ Many mountain towns and villages have been busy issuing public bonds to pay for their share and by now most of them are *neck-deep* in debt. [AEN, Aug. 3, '97, p.4 ((借金で) 首が回らない)]
- ⑪ At 10 p.m. it was *pitch-dark*, and we were finding our way with head torches, ... [Newsweek, May 27, '96, p.43 (真っ暗闇の; 漆黒の)]
- ⑫ Individuals who are *car-sick* may be good sailors and vice versa... [20CW, p.13 (乗り物に酔った、車酔いの); *airsick, seasick* などの複合語もある]
- ⑬ A Canadian judge ordered the winner of a \$1.53 million lottery prize to pay monthly support to her estranged, *welfare-dependent* parents. [Time, Mar. 31, '97, p.15 (生活保護に依存している)]
- ⑭ A barrage so incessant ... that many troops of the crack 65th Nazi Division were rendered ‘*bomb-happy*’ and fell easy prisoners. [20CW, p.263 (爆撃でぼうっとなった、爆弾恐怖症の)]
- ⑮ The Agriculture Ministry last month called Sakaiya an idiot for questioning Japan’s *sky-high* rice tariffs. [Time, Feb. 8, '99, p.21 (= ‘very high’ — RHWCD)]
- ⑯ But the California legislature has found it exceedingly hard to draw up

statewide standards. [*Economist*, Feb. 7, '98, p.65 (全州的な、州全体にわたる)]

⑰ The Secretariat, they contend, is *top-heavy* and overpaid, with an estimated half of the professional staff members earning \$ 100,000 a year or more. [*Time*, Oct. 4, '93, p.17 (逆三角形の、幹部が多過ぎる)]

⑱ ...plans adopted Friday to make Kobe a *quake-resistant* model city. [*JT*, July 2, '95, p.2 (耐震の、地震に対して抵抗力のある); *quakeproof*とも言う]

上に挙げた代表的な“Noun + adj.”型の複合形容詞の用例からも明らかに、このタイプにもいくつかの種類があり、統語的な側面から基底構造を推定し、各形容詞の意味内容とコロケーションに注意してパラフレーズを試みると、意味が一層把握しやすい。しかし、ここでは詳細な解説は行わない。基底構造に着目した統語面からの分析作業については、次節の中で詳しく説明したい。

(3) “Noun + adjective” 型複合形容詞の生成プロセス —— 基底構造と頻出形容詞

前述したように、限定的修飾語句を後置から前置へ、多くの場合ハイフンを付けて移動させて簡略化し、主要語の名詞の前に限定付加語として配置されて出来上ったものがこの複合語である。次に、いくつかの使用例を挙げ、それらがどのような基底構造から生成されたかを、詳しい解説を適宜加えながら、パラフレーズした形で示すことにする。20種の複合形容詞を含む表現を順次提示し、統語的側面に着目しながら生成過程を精査してみることにしたい。まず3例 (I～III) に見られる通り、イタリック体の“N + adj.”の部分の語義を示す。次に、提示した句 (または表現) 全体をパラフレーズし、必要に応じて語句についての詳しい説明を加えることにする。

(例Ⅰ) : an *earthquake-prone* country (地震多発国)

= ‘a country that is prone to earthquakes’

(例Ⅱ) : *oil-rich* Kazakhstan and Azerbaijan (石油の豊富なカザフスタンとアゼルバイジャン)

= ‘Kazakhstan and Azerbaijan that are rich in oil’

(例Ⅲ) : Today’s *consumption-mad* Asian countries (今日の、消費にうつつを抜かしているアジアの国々)

= ‘Today’s Asian countries that are mad about consumption’

以上、パラフレーズした例を三つ示した。以下同様に、20の用例を提示して語義を与え、パラフレーズあるいは辞典の定義を紹介しながら関連事項の説明を補足したい。

① a *fuel-efficient* car (低燃費の車)

= ‘a car that uses comparatively little fuel’

いわゆる「省エネタイプの車」のことで、slangでは ‘a gas sipper’ とも言う。‘a gas-guzzling car’ とか ‘a gas guzzler’ と言えば、これとは逆に「ガソリンを大量に食う燃費の悪い車」のことである。

② *lead-free* gasoline (無鉛ガソリン)

= ‘gasoline which is free from gasoline’

nonlead(ed) (or unleaded) gas とも言う。

-freeを用いた複合語には、*barrier-free*, *toll-free*, *duty-free*, *cruelty-free*, *emission-free*, *smoke-free*, *carefree*, *radar-free* など、その数は多数である。

③ *residue-prone* agricultural chemicals (残留性農薬)

= ‘agricultural chemicals with a tendency toward residues’

ここで使われている *-prone* は combining form として “having a natural tendency toward something disposed” [RHWCD] の意味を表す。

「(...) の 傾向がある、(...) しがち、(...) しやすい」という意味で、

flood-prone (洪水が起きやすい)、*avalanche-prone* (雪崩が起きやすい)、*accident-prone* (事故を起こしやすい) などの語がある。

④ a *waterproof* blanket (防水加工した毛布)

= ‘a blanket which is resistant to or impervious to water’ *-proof* 形は数が多い。例えば、a *bulletproof* vest (防弾チョッキ) のように用いられるが、*bulletproof* (= designed to resist the penetration of bullets) [NODE], *soundproof* (= impervious to sound : 「防音の」) [MWCD¹⁰], *leakproof* (= designed to prevent leaking : 「秘密が漏れない」) [RHD], *light-proof* (= impenetrable by light : 「光を通さない」) [MWCD¹⁰], *fireproof* (= impervious or resistant to fire : 「耐火性の、防火の；不燃性の」) [AHCD] などのほかに *heatproof* (「耐熱の」)、*quakeproof* (「耐震の」) のような語もある。

⑤ an *idiotproof* camera (低能でも写せるカメラ、つまり全自動カメラ)

ここで用いられている *idiotproof* という複合語は、*foolproof* とも言い、その意味は、‘1. involving no risk or harm, even when tempered with. 2. never-failing.’ [RHWCD] で、「馬鹿でも簡単に扱える (カメラ)」とか「誰がやっても大丈夫な」という意味となる。*-proof* (= resistant to, safe against or for…) 「保証付きの、操作に耐える、安全な」という意味があるためである。*foolproof* よりも *idiotproof* の方が意味が強い。なお、類似の *childproof* という語は「子供にとって安全な」の意味である。*burglarproof* (「盗難よけの」) も類似表現。

⑥ *insulin-dependent* diabetics (インシュリン依存性糖尿病患者)

= ‘diabetics (who are) dependent on insulin’ という統語的ルールに従った表現が基底部にあり、そこから変形して前置修飾語になっている。

⑦ a *bombproof* shelter (防空壕)

= ‘a shelter which is proof against bombs’

bombproof は「防弾の、爆弾よけの」という意味。

⑧ a *razor-thin* margin (紙一重の差)

= 'a margin which is (as) thin as a razor'

つまり、カミソリのように薄い ('very thin') という意味から「紙一重の、きわどい」といった意味になる。

⑨ *E-free* foods (無添加食品)

= 'foods which are free from E number'

E number (<Europe number) とは「食品添加物」 (= additive) を指す。*-free* 形の複合語はすでに②で扱っている。すでに慣用化しているものも多く、*sugar-free* (砂糖を加えない) とか *caffeine-free* (カフェイン抜き) のようにごく一般的に用いられる。

duty-free (= 'free of customs duty' - [RHWCD]) や *cruelty-free* (= 'produced without inflicting pain on or otherwise being cruel to animals' - [Register 90]) の定義を参考までに示しておく。

⑩ Cambodia's *resource-rich* border areas (カンボジアの資源豊かな国境地域)

= 'Cambodia's border areas that are rich in resources'

例えば *cash-rich* firms (資金豊富な会社) ; *Calcium-rich* foods like milk, cheese and yogurt ; Sierra Leone, a *diamond-rich* West African country などの *-rich* を用いた複合語も同類である。

⑪ *HIV-positive* patient (エイズウイルスが陽性の患者たち)

HIV-negative の反意語。

= 'patients who have a positive result in a blood test for the AIDS virus HIV'

NODE の定義を借用した、やや説明的なパラフレーズではある。

⑫ *gender-neutral* language (性中立的な言語)

= 'language which is neutral in gender'

「男女の区別のない言語」。「性差のない、性中立的な言語」とは、例えば *chairperson*, *firefighter*, *salesperson* のような語の使用を指している。*gender-neutral* は *gender-blind* とも言う。

- ⑬ an *age-specific* disease (特定年齢層に限られた病気)

= ‘a disease which is specific (or restricted) to a particular age-group’

- ⑭ those *color-blind* members (人種的偏見を持たないそれらのメンバーたち)

= ‘those members who make no distinctions on grounds of skin color or ethnic origin’

TED の定義を利用しての解説的パラフレーズ。*color-blind* は19世紀の中葉 (1854) に「色盲の」の意味で使われるようになり、ここで使われている語義はそれとは違って、「人種の差別をしない」という新しい意味で使われる。初出年は1950年頃とされている。

- ⑮ the *dirt-poor* town of Anshun (貧困にあえぐアンシャンの町)

= ‘the town of Anshun that is extremely impoverished’

この *dirt-poor* という語も、*dirt-cheap*, *razor-thin*, *ice-cold*, *brand-new*, *rock-solid* などの複合語と同じく、metaphorical な表現法であり、(as) poor as dirt, (as) cold as ice, (as) solid as a rock などの直喩に由来する強意的造語である。

- ⑯ *health-conscious* Americans (健康に強い関心を示すアメリカ人)

= ‘Americans who are conscious of health’

ここでの ‘-conscious’ の意味は ‘concerned with or worried about a particular matter’ [NODE] である。*money-conscious* (金に敏感な) とか *beauty-and weight-conscious* (美容と体重に神経質な) のように頻繁に使われる多産型である。

- ⑰ a *bloodthirsty* dictator (血に飢えた、残虐な独裁者)

= ‘a dictator who is thirsty for blood’

初出年が1525 - 35と推定されている歴史の古い ‘*bloodthirsty*’ という複合語は、‘having or showing a desire to kill and main’ [NODE] という意味を持ち、短的に言えば ‘murderous; cruel’ [*TED*] である。

- ⑱ a *knife-happy* surgeon (むやみに手術をしたがる外科医)

第2構成要素としての*-happy*の意味は‘inclined to use a specified thing excessively or at random’ [NODE]であり、「やたらに使いたがる、すぐ (...) したがる；夢中になった、取りつかれた」の意味を表す。よく使われる *trigger-happy* (= ‘Slang. 1. Tending or desiring to shoot a firearm before adequately identifying the target. 2. Inclined to react violently at slight provocation.’ [AHCD] や *bomb-happy* (前出) などの語も類似した使い方である。

⑲ a more *child-friendly* traffic society (子供により優しい車社会)

= ‘a traffic society that is more friendly to children’

この種の*-friendly*タイプの複合語も多産型で数多く生成されている。*user-friendly* [初出年は1977] という語がこのタイプの先駆的存在とされる。*reader-friendly* (読者本位の)、*environment-friendly* (環境にやさしい) など、枚挙にいとまがない程応用形が生成されている。

⑳ a *camera-shy* artist (写真嫌いの芸術家)

= ‘an artist who is shy of being photographed or filmed’

ここで使われている第2要素の*-shy* (of) は‘having a dislike of or aversion to a specified thing’ [NODE] の意味で用いられ、*media-shy* (マスコミ恐怖症の) とか *gun-shy* (銃声におびえる；ひどく用心深い) のような語に生きている。

以上、第2構成要素を異にする約20種の複合形容詞を含む表現を詳細に分析し、考察を加えて来た。その際、統語的視点と意味の側面から基底構造を想定し、それを基盤に *asyntactic adjective compound* の生成プロセスをわかりやすく具体的に説明した。

第2要素に使われる形容詞は多様であるが、それらを用いて生成された *adjective compound* の種類は、ある種の基準を適用すれば10種に満たないと考えられる。この分類は紙幅の制約上本稿では扱わずに次回 (第2弾) に回したい。

いずれにせよ、上述の考察と解説で、“Noun + adj.”型の特徴の一部が明らかになったと思われるが、すべての adjective が noun と結びついてこのようになるとは限らず、辞典に記載されるほど慣用的表現として確立するまでには、ふるいにかけられ、選り分けられ、かなりの年数を要している。

例えば、simile に由来する *wafer-thin*, *razor-sharp*, *fish-drunk* (<as drunk as a fish「泥酔して」)に見られるような造語法を模倣した語句として、*wolf-(or hawk-) hungry* (<as hungry as a wolf or a hawk「ひどく空腹の」)、*fox-cunning* (<as cunning as a fox「悪賢い」)とかあるいは *bull-(or horse-) strong* (<as strong as a bull or a horse「きわめて頑健な」)などの表現が考えられるが、たとえ形態上ばかりでなく意味上も成り立っているとしても、このような結び付きの複合語は内外のどの辞典にも辞書項目としては見当たらないようである。つまり、可能性のある語形式のうちから限られたものだけが人口に膾炙することになるのである。

それでは次章において、現代の *journalese* の中で使われている“N + adj.”型複合形容詞がいつ頃から使われるようになったかという初出年調査を、1語1語について個別に行ってみたいと思う。

Ⅲ. “Noun + Adjective”型複合形容詞の初出年調査

一般に、新しい語句が生まれてからある期間の使用に耐え、辞書項目として英米の主要辞典に初めて記載されるようになると、その中の多くは初出年あるいは推定年が付記されるのが普通である。

ある語がいつ頃に誕生し、一般に流布するようになったか、語義にどんな変化が生じたか、どのような新しい意味が付加されるようになったか、語形がどう変ったか等の語彙の歴史とか変遷について知ることも、語彙に関心のある研究者にとっては興味をそそる対象である。社会の変化、世界の動向、テクノロジーの発展等を如実に反映する言語、特に語彙面の変化に着目することで、得られるメリットは決して少なくない。

今回も内外の主要辞典に一語ずつ当って、初出年を調べる作業を行ったが、ごく最近生まれた新語、あるいは新しい表現については、最新刊の各種新語辞典を見ても不明の部分に残り、初出年が明記されていない語も若干あった。

今日まで数百年にわたって延々と使用されている寿命の長い語もあるが、“Noun + adj.”型複合形容詞に限って言えば、20世紀に入ってから21世紀に至るまでの過去百年間が、特に多量生成の期間であると言えよう。

調査の対象とした“Noun + adj.”型複合形容詞は、筆者が過去10年間に現代の英語 *journalese* の中で実際に使用されていたものを収集した語がほとんどあり、従って、頻度の差こそあれ現代英語の中で生きている語である。

利用した辞典は、*OED*, *OEDS*, *RHD*, *RHWCD*, *MWCD*¹⁰, *NODE*, *20CW*, *2nd Barnhart*, *3rd Barnhart*, *Register* ('89 & '90 edn.), *CDNW* などである。

古いものから順に列挙すると、*snow-white* が¹²12世紀以前、*blood-red* が¹¹1150年頃、*heartsore* が¹²1200年以前ということになる。

14世紀に *watertight* が生まれ ([1350–1400])、*blameworthy* は1375年 [1350–1400] 頃と推定。

15世紀に入ると *jet-black*, *praiseworthy*, *heart-whole*, *knee-deep* が仲間入りする。次の16世紀以降については、語数が次第に多くなっていくので、表で示すことにする。

A. 16世紀～19世紀：

16世紀	<i>crystal-clear</i> (ca. 1520), <i>heart-sick</i> (1526), <i>top-heavy</i> (ca. 1533), <i>bloodthirsty</i> (1535), <i>noteworthy</i> (1552), <i>seasick</i> (ca. 1566), <i>brand-new</i> (ca. 1570), <i>fancy-free</i> (1590)
17世紀	<i>penny-wise</i> (1607), <i>pound-foolish</i> (1607), <i>windproof</i> (1616), <i>worldwide</i> (1632), <i>cocksure</i> (1672), <i>duty-free</i> (1689)
18世紀	<i>bombproof</i> (1702), <i>waterproof</i> (1736), <i>knee-high</i> (1743), <i>heart-</i>

	free(1748), airtight(1760), world-weary(1768), airsick(1785), carefree(1795)
19世紀	seaworthy(1807), trustworthy(1808), agelong(1810), *sky-high(adv. 1818; adj. 1840), roadworthy(1819), dirt-cheap(1821), bone-dry(ca. 1825), homesick(1827), pitch-dark(1827), airworthy(1829), trustworthy(1829), *homebound(1834), world-famous(1837), burglarproof(1850), *color-blind(1854), bulletproof(1856), dustproof(1869), God-awful(1878), soundproof(ca. 1878), *homebound(1882), gun-sky(1884), skintight(1885), color-sensitive(1888), battleworthy(1889), war-weary(1895), water-repellent(1896)

B. 20世紀 (1901～現在) :

1901 - 29	class-conscious(1903), acid-fast(1904), age-old(1904), stir-crazy(1908), carsick(1908), acid-proof(1909), shockproof(1911), word-final(1918), word-initial(1918), water-resistant(1921), razor-sharp(ca. 1921), camera-shy(1922), tax-exempt(1923), color-weak(1924), accident-prone(1926), paper-thin(1928)
1930 - 59	acid-free(1930), newsworthy(1932), woman-conscious(1934), slaphappy(1936), dirt-poor(1937), ovenproof(ca. 1940), trigger-happy(1943), *sky-high(1945), water-insoluble(1946), *color-blind(1948), sentence-final(1949), color-conscious(1952), labor-intensive(1953), childproof(1956), picture-perfect(1956), color-defective(1958), capital-intensive(1959)
1960以降	machine-readable(1961), age-specific(1963), sentence-initial(1964), streetwise(1965), camera-ready(ca. 1965), cost-effective(1967), energy-intensive(1967), host-specific(1969), man-portable(1973), media-shy(1973), street-smart(1974), plug-compatible(1974), child-resistant(1975), leakproof(1976), computer-literate(1976), idiotproof(1977), user-friendly(1977), cost-effective(1979), gender-specific(ca. 1980), Insulin-dependent(1987)

上の表の中で、() 内に示した初出年のすぐ前に、ca.と書いてあるのが数語である。このca.は‘about’（「およそ、大体」<Lat. *circa*）の意味で使っている。*印が付いている語について、注釈をつけておく。

*1) sky-high: OEDによると、1818年にadv.として初めて使われ、‘As high as the sky’の意味であった。次に、1840年にはadj.として‘Reaching to the sky’の意味が付加し、更に20世紀に入って1945年になると‘excessively expensive’ [MWCD¹⁰] という語義変化が生じ、例えばsky-high rents（べらぼうに高い家賃）とかsky-high cost of land（天井知らずの地価）のような用法が定着する。

*2) color-blind: 1854年に初登場。その時の意味は「色盲の」であった。約95年後（1948年）には「人種的偏見を持たない」という意味でも使われるようになった。

*3) homebound: 1834年が初出年。意味は‘bound for home’（帰宅中の；本国行きの）で、boundは‘intending to go: GOING’ [MWCD¹⁰] という意味を表す。もう一つ別の意味として‘confined to the home’ [MWCD¹⁰]（「家に閉じ込められて」）があるが、この場合はboundは‘bind’（縛りつける）のadjectival p.p.用法（1882）。

初出年の調査に当っては、上の表の1語1語について権威ある英米の辞典や各種新語辞典を渉猟し、記述や記載事項を比較・吟味しながら、妥当と思われる初出年を採用した。はっきり年代を記載していない辞典、ca.と記して特定しない書物、等々で、不明・不確実の語が少数残る結果となった。しかし、大多数の‘N + adj.’型複合形容詞は紛れもなく表中にある。

1例を挙げると、‘fail-safe’という新語について調べた結果は辞典によって初出年の示し方がまちまちであった。

(1945 - 50) [RHWCD], (1946) [MWCD¹⁰], (1948) [3rd Barnhart],
(1958) [OEDS], RHDには記載なし。(1948) [20CW]

これに近いケースは時々生じたが、初出年決定のむずかしさが痛感される。

上の表を仔細に点検すると、12世紀から20世紀に至るまでに造語法にどんな変化が生じているか、ある程度知ることが出来るであろう。その特徴をいくつか個条書きで列挙すると

(A) 12世紀——16世紀まで：

- 1) snow-white, blood-red, jet-black, pitch-black, brand-new, crystal-clean など、‘as...as ~’ 型の simile に由来する metaphorical expression が圧倒的多数を占めている。
- 2) heartsore, top-heavy, heart-sick などの ‘S + (be +) adj.’ に還元出来る語構成を持つものが若干ある。
- 3) worthy (of), thirsty (for), sick (from) のような instrumental または adverbial な用法と見られるものが散見される。

(B) 17世紀以降：

- 1) 世界の動向、政治・経済・社会・科学技術等の分野における変化・進展に伴い、複合語は徐々にその数を増し、種類も変化に富み、表現も豊かさと適切さの度合いが深まる傾向が認められる。20世紀以後は特に多量に生成されている。
 - 2) metaphorical な表現は依然として増加している。
 - 3) 用いられる形容詞の種類も多様化している。
 - 4) 第2要素の形容詞の語尾が^s-able, -dant, -dent, -ible, -siveで終る生成法が顕著になっている。
 - 5) 類出形容詞として -friendly, -free, -happy, -shy, -proof, -specific, -savvy、等が挙げられる。
 - 6) 語形は同一でも、時代の経過と共に新語義が付加されるケースもある。
- 以上がこれまでの推移から指摘出来る主要な特徴かつ傾向である。

IV. 結び

‘Noun + Adjective’型の複合形容詞について、筆者が収集した用例を基にその生成の仕組みを基底構造から解説し、現代のprint mediaの中で実際に使われている展型的パターンと近年多用される頻出度の高い形容詞の種類と用法、その特徴を詳細に記述した。併せて、12世紀以来今日に至るまでに生成されたこの種の複合語について、その初出年を調査し明示した。

次の第2弾では、特徴の更なる明確化とタイプの分類を試み、分類項目別用例を多数具体的に提示したいと思う。

References

《注》末尾の [] 内は本稿で用いた略字を示す。

- Adams, Valerie. (1973). *An Introduction to Modern English Word-Formation*. London: Longman.
- . (1993). *The American Heritage College Dictionary*. New York: Houghton Mifflin Co. [AHCD]
- Ayto, John. (1989). *The Longman Register of New Words*. Harlow, Essex: Longman. [Register 89]
- . (1990). *The Longman Register of New Words*. Harlow, Essex: Longman. [Register 90]
- . (1999). *Twentieth Century Words*. Oxford: Oxford Univ. Pr. [20CW].
- Barnhart, Clarence L., Sol Steinmetz & Robert K. Barnhart. (1980). *The Second Barnhart Dictionary of New English*. New York: Barnhart/Harper & Row.
- Barnhart, Robert K. et al. (1990). *Third Barnhart Dictionary of New English*. H. W. Wilson Co. [3rd Barnhart]
- Barnhart, David K. (1991). *Neo-words: A Dictionary of the Newest and Most Unusual Words of Our Times*. New York: Macmillan Publishing Co.
- Barber, Charles. (1964). *Linguistic Change in Present-day English*. London: Oliver & Boyd.
- Bauer, Laurie. (1983). *English Word-formation*, Cambridge: Cambridge Univ. Pr.
- Bryson, Bill. (1996). *Made in America: An Informal History of the English*

- Language in the United States*. New York: Avon Books.
- Burchfield, Robert. W. (1992). *Points of View : Aspects of Present-Day English*. Oxford: Oxford Univ. Pr. Paperback edn.
- . (1996). *The New Fowler's Modern English Usage*. Oxford: Clarendon Pr. 3rd edn.
- Green, Jonathon. (1985). *Webster's Standard American Style Manual*. Springfield, Mass: Merriam-Webster.
- . (1991). *Bloomsbury Neologisms: New Words since 1960*. London: Bloomsbury Publishing Ltd.
- (1993). *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary*. Springfield, Mass: Merriam-Webster, Inc. 10th edn. [MWCD¹⁰]
- (1986). *12,000 Words: A Supplement to Webster's Third New International Dictionary*. Springfield, Mass: Merriam-Webster, Inc.
- Knowles, Elizabeth. et al. (1997). *The Oxford Dictionary of New Words*.
- Matthews, P.H. (1991). *Morphology*. Cambridge: Cambridge Univ. Pr. 2nd edn.
- Murray, J.A.H. et al. (1970). *The Oxford English Dictionary*. 13 vols Oxford: Oxford Univ. Pr. (Reprinted). [OED]
- Burchfield, R.W. (ed.) (1972-86). *A Supplement to the OED*. 4 vols. Oxford: Oxford Univ. Pr. [OEDS]
- O'Donnell, W.R. & Todd, Loreto. (1991). *Variety in Contemporary English*. New York: Routledge.
- Pearsall, Judy. (ed.) (1998). *The New Oxford Dictionary of English*. New York: Oxford Univ. Pr. [NODE]
- Quirk, Randolph. et al. (1989). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London & New York: Longman Inc.
- (1987). *Random House Unabridged Dictionary*. New York: Random House. 2nd edn. [RHD]
- (1991). *Random House Webster's College Dictionary*. New York: Random House. [RHWCD]
- Sheard, J.A. (1970). *The Words We Use*. London: Andre Deutsch, Ltd. (The Language Library).
- Tulloch, Sara. (1991). *The Oxford Dictionary of New Words: A popular guide to words in the news*. Oxford: Oxford Univ. Pr.
- (2000). *The Times English Dictionary*. Glasgow: HarperCollins. [TED]

(本学経営学部教授)